

この法師の旅姿なりけり。」
と自序にもみえるように、師を失った以後の作品であるだけに、支考独自の見解が反映されているとみる事ができよう。

この二書の成立時期と支考の句風の特徴ということを併せ考えてみると、先に触れた支考の理づめの傾向は、「笈日記」には比較的弱く、類似の句もあまり多くは見られない。しかし、「梟日記」になると、理にはしる傾向はやゝ強くなり、理が前面に出た句がめだつようになつて来ている。

これは、支考が芭蕉をどう受けとめたかということとつながる問題であつて、支考には芭蕉生前から、理にはしるという気配はみられるけれども、それほど強調されなかったものが、芭蕉の没後、支考の理づめの傾向が、より強く強調されていったということになるわけである。

ことを換えてみるならば、芭蕉によって触発された支考の理を優先させるという芽が、芭蕉生前はその直接的指導によって、即ち芭蕉俳諧の座の圏内に在る間は、芭蕉の容認できる範囲にとどまり、傾向として弱かつたものが、芭蕉没後、芭蕉の直接的指導という枠、芭蕉の座をはなれたことによつて、支考自身の資質、体質と相まって、理を優先させるという行き方に強まりを見せ、支考的に展開されることになつて、作品が感性、感覚で把えられず、むしろ理で把えられるという傾向が露わになつて来たと見ることが出来る。

〔註〕「古池」の句についての、「ありのまま」ということについては、正岡子規も「芭蕉雑談」の中で

「古池の句は実に其ありの儘を詠せり、否ありのまゝが句になりたるならん。」（明治二十六年十一月二十四日「日本」という理解を示している。

ばとして、

「とし／＼や猿にきせたる猿の面

此歳旦、師のいはく、人同じ処に止て同じ処にとし／＼落入る事を悔ひていひ捨たるなり。」

とあって、芭蕉が自己を顧りみて得た寓意の句であることを述べている。

支考の句は、先に触れたように、理にはしつた観念的な表現という一面を持っているのであるが、その理づめの句風は、右の芭蕉の句にみられる技術的に理を優先させ、理づめに表現するという傾向の部分を受けとめたと見ることができるのである。

さらに、支考の芭蕉享受と、その支考なりの展開のしかたを考えてみたい。

前掲の支考作品

耕作のまづ手習や夏大根

日晴ては落花に雪の大井川

竹にねてすべりおちばや夕涼み

の三句は「笈日記」所収の作品、

宇治にて山なつかしき新茶かな

腸に秋のしみたる熟柿かな

稍まで来てゐる秋のあつさかな

は「梟日記」所収の作品である。

「笈日記」は「元禄乙亥の穉七月十五日」の自序を持ち、芭蕉晩年実現しなかつた遺志を体して、奥州・北陸を除く芭蕉「旧遊の地をたづねてその時のありさまを思ひあはせ」芭蕉の遺吟・遺文を集め、各

地俳人の芭蕉追悼句、芭蕉死去前後の様子の日記的記録、それに岐阜の安川落梧の未刊遺稿「瓜畠集」を加えたものである。

刊行は自序の元禄八年七月から、元禄八年中、芭蕉死後、一年足らずの間にまとめられたものである。

元禄七年九月からの芭蕉最後の旅には、支考は惟然らと共に随伴し、忠実な弟子として薪水の労をとり、その病臥に際しては、専ら看護に従った。その誠意に対しては、芭蕉遺状の一通に芭蕉が加筆したことばかりも察せられるように、芭蕉にもっとも近い位置に支考が居たと考えられる。そういう芭蕉と支考との師弟関係、人間的なつながりを考えるとき、芭蕉死後間もない元禄八年に刊行された「笈日記」の性格も、自ら定まってきたとみられる。

支考が芭蕉の足跡を追慕し、各地の俳人の追悼句を集録しているのも、芭蕉追悼の心の素直な表現とみられるし、「瓜畠集」を加えたことにも、同郷の俳人への配慮がみられ、そこには、晩年の支考について巷間言われるような自己宣伝めいた態度はみられず、むしろ誠実で謙虚な師への尊敬の態度が感じられる。そうみると「笈日記」は、支考の師説敷衍、師風の反映という心の厚い作品集とみることができよう。

これに対して「梟日記」は、元禄十一年四月から九月にかけて、支考が大坂から九州へ下り、各地を廻って下関に帰るまでの俳諧紀行が中心であり、芭蕉死後四年を経た、元禄十一年九月に成ったものであり、翌元禄十二年に刊行された。

芭蕉俳論とのかかわりや去来の周辺についての記述には興味深いものがあるが、内容としては、旅中の俳諧日記であり、

「されば瘦藤に月をかゝげ、破笠に雲をつゝむといふ、むかしのひとのあとをまねびたるにはあらで、風雅は風雅のさびしかるべき、

句である。句意は、

「去来へ此の句ををくられし返事に、此句二義に解すべくさふらふ。山さとは風さむく、梅の盛にまんざいのきたらん、どちらもおそしとやうけたまはらん。又山さとの梅さへ過るに万歳どののこぬ事よ」と京なつかし詠や侍らん。」（芭蕉翁頭陀物語）建部涼袋、寛政四年刊）

にみられるように、異説もあるが、前者ととれば、梅の花の咲く季節には、年中行事として、毎年三河あたりから万歳がにぎやかに新春の御慶を述べにやってくるのである。ところがこゝ伊賀上野は山深い地方であるが、そのため都や上方の地方とはちがって、万歳のやって来るのが遅い。そして四囲山にかこまれたこの地方は、他の広く開けた地方とは異って、万歳同様梅の花も咲くのが遅いことだといった句である。

この句では、万歳の訪れて来るのが遅いのは山里であるからだ。同様にこゝは山里だから梅の花の咲くのも遅い、としたところに、自然の事象をそのまま表現しないで、理屈や原因を前面に出して、観念的な把握のしかたをとったところに特徴がある。

青くてもあるべきものをたうがらし

（元禄五年「俳諧深川」）

「青唐辛子」という呼び名もあるように、唐辛子は青いままでも、唐辛子としての特質はあるものである。それが熟すにつれて真赤にあざやかな色彩を持つてくる。青いままであってもよいものであるのに、その名に反してこの唐辛子は色あざやかにみごとな真赤な色をしていることよ、青唐辛子などという名まであるのに、どうしてあのようにあざやかな色を見せていることだろうか、といった意味の句である。

これは、「青唐辛子」という色彩を想像させることばから、逆に眼前の赤さを言ったもので、唐辛子の本領、特質は色ではなく、辛いということに在るのに、その事を言わず、色彩の赤さを表現したものである。「笈の底」にも、

「何れにも、この青くても云詞にか改有るべけれ共、燕雀大鵬の心弁へ難し。後人足らざるを評せよ」

と「青くても」に寓意を感じ、それを「弁へ難し」と述べているところに、この句の特徴を捉えているが、感性よりも理を優先させるという傾向がみられる。

年々や猿にきせたる猿の面

（元禄六年、真蹟）

この句には、「元旦」と前書があり、元禄六年の歳旦吟である。芭蕉は元禄六年の新春を江戸で迎えているので、この歳旦吟も江戸での作である。句意は、毎年毎年春になると年の初めの年中行事として、派手な装いをこらして、猿まわしがやって来る。今年もその猿まわしがやって来て、いつもの年とかわらずにぎやかなことだが、その猿まわしの猿が猿の面をつけさせられ、笛や太鼓におどらされている。毎年このことながら、猿の面を着せられた猿のあわれな様よ、といった意である。

この句は作者の寓意を持たせた句で、年ごとに同じように猿まわしは滑稽で悲しいものである。人生も「日を重ね年は積れども、別にかはることもなく、唯、猿に猿の面を着せたる様」（師走囊）の滑稽でわびしいものである。人生も猿まわしの猿のように、年々進歩もなく老を迎えてしまうことは、はかなく滑稽なものだと、諷刺的に表現したものである。このことに触れて「三冊子」にも、芭蕉自身のこと

強くしたという句である。

この句は、眼前の実景、ありのままの状態を、ありのままの形で、事実として表現し、「水のをと」によっていっそう強く感じられる心理的静寂感を表出した句である。この句の制作年代は貞享三年である。

これに対して、「歌書よりも」の句は、芳野山の花という眼前の実景をはなれ、「歌書」とか「軍書」というものを観念的に提示し、そのうえ、さらに「歌書よりも軍書に」と「よりも」によって、軽いものを挙げ重いものを類推させる形で歌書と軍書とを比較対比し、「かなし」を引き出す表現をしている。そのあたりに、支考のこの句における、技法的に理にはしつた、あるいは理づめの一面をみることができる。

このように見てくると、支考の句には、それぞれ句によって度合いのちがいはあるけども、右に挙げた句に共通する特徴として、観念的発想、因果論的手法といった、理にはしる一面がみられるということができる。

それでは、右のような支考作品の傾向は、どのようにして支考の中に生まれたかということになるが、支考が最も親炙し、最も影響を受けた時期の芭蕉の句の代表的な技法は何であったかについて眺めた。

今、例句を挙げて、芭蕉の句にみられる支考作品との共通点について具体的に触れてみることにしたい。

日の道や葵傾くさ月あめ

(元禄三年「猿蓑」)

「日の道」は太陽の軌道、日の通り過ぎてゆく方向である。「葵」は「葵は日向葵として一名は日車ともいへり」(「師走囊」正月堂著、

明和元年刊)

「此句に葵といへるは向日葵、一名文菊。又日まはりといふものか。常の葵は日に向ふ事なし。」(「朱紫」法橋吾山著、天明四年刊)

「葵は日影の方に葉を傾て回る草也。」(「笈の底」信天翁信胤著、寛政七年稿)

などと向日葵とする説と、ふつうに言う葵または立葵とする説にわかれる。

「葵」がそのいずれであるにせよ、この句は、「さ月あめ」即ちしとしと暗く降り続く五月雨の日で、空は雨雲に覆われている。そのため日の道も判然せず、今の太陽の在り処も明らかでない。それなのに、葵は宿命のように日の道と思われる方向に背を向け、傾いて咲いている五月雨の中の光景よ、といった句である。日の道も明瞭にわからないのに、日の道と思われる方向に背を向けて咲いているのは、やはりあの方向が日の道なのであろうか、と理屈を先行させた句とみることができる。古注にも

「いたづらに日を過しかなしめ共、彼のあふひを見ずや、日影も見えざれ共日の方へ向ひて終日おこたらず、人は葵にもをとれりといふ心」一切の生を得たるもの有情非情草木に至る迄此日の道に違ふ事なし。聖人の道も此の日の道の外にあるべからず。」(「猿みのさかし」釋柯坊空然著 文政十二年刊)

といった、この句を比喩的教訓的な句とする見解もみられる。

やまさとはまんざい遅し梅花

(元禄四年、真蹟)

この句は「伊陽山中初春」の前書があり、元禄四年の新春を大津で迎えた芭蕉は、新年早々伊賀に帰り、橋木亭での句会に一月中に得た

いた点がみられる。

腸に焔のしみたる熟柿かな

〔梟日記〕坤)

秋も終わりに近づいて霜が降りると、渋柿の渋も抜けて熟柿となる。熟柿は晩秋を代表する果物である。その甘い熟柿を食べると、口に広がった甘さは、やがて腹の中まで伝わり、熟柿の甘さ冷たさが腹の底まで泌みわたって、秋をしみじみと感じることだ、といった句である。

この句の自評に

「評曰、始の熟柿は西瓜に似てあらず。西瓜は物を染て薄く、熟柿は物をそめて濃ならん。漸寒の情つきたりといふべし」

〔梟日記〕坤)

併とあり、腹にしみる熟柿の甘さ・冷やかさによって晩秋漸寒の情を詠った句である。

考 この句では、食べたのが熟柿であったことによって、歯や口に泌み支 つめたい甘さを感じたことを、腸に秋がしみると誇張した表現によって、理づめに季感を表出したものであると言える。

梢まで来てある秋のあつさかな

〔梟日記〕坤)

暦の上ではすでに秋となって、ようやくおとずれた初秋の気配は、梢吹く風の音でそれと知られる。秋という清爽な季節は、もうそこまです、木々の梢のあたりまで来ているのに、ぎらぎらと照りつける夏の名残りの強い日ざしのなんとまあいつまでも暑いことよ、といった句で

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

藤原敏行

あか／＼と日は難面も秋の風

芭蕉

などの作品を想起させる句である。この句では、秋の到来を「梢まで来てある」と理屈で把握し、残暑の酷しさを「あつさかな」と表現したところが、理のかった句だと言えるであろう。

次に支考の代表句とされ、「俳諧古今抄」(享保十五年刊)所収の人口に膾炙した句、

歌書よりも軍書にかなし芳野山

を眺めてみたい。

芳野山は桜の名所であり、古来歌枕にも数えられていて、芳野山の桜を詠んだ歌は多いが、西行の「山家集」などの歌書・歌集に見られる花の芳野山よりも、南北朝時代の、所謂吉野哀史を伝えた「太平記」など軍記に語り伝えられた、芳野山にまつわる人間のはかなさ、無常迅速を感じさせる歴史の悲劇の方が、はるかにあわれさを感じさせられることだ、といった句意である。南北朝抗争の中での南朝方の武士の悲運を背景にした作品である。

今、これらの支考の句と、芭蕉の代表句といわれる

古池や蛙飛こむ水のをと

(貞享三年「春の日」)

と比較してみると、そこに「歌書よりも」の句の特質をより明らかに把握することができる。

「古池や」の句は、古池のものの静かな、素朴なたたずまいがあつて、その古池へ一匹の蛙が飛び込み、かすかな、短い水音をたてた。その蛙の飛び込んだ音によって、あたりの静寂が一瞬破られた。しかしその後にはもとの静寂にかえって、あたりの雰囲気はいつそう閑寂の感を

ら受けとめたものを考え、支考の俳諧的性格を考えてみたいと考える。
まず支考作品から、例句を挙げて考えてみたい。

耕作のまづ手習や夏大根

(「笈日記 下」岩崎)

この句は、耕作の手ほどきをする場合、耕作の体験が浅く、不慣れな人、素人には、耕作のむずかしい農作物を作らせるのではなくて、まずその手ほどきに、手はじめには、ちょうど文字の手習いにやさしい文字から学ぶのと同じように、耕作の容易な、耕して種を蒔きさえすれば、発芽、成長して収穫することのできる夏大根から作らせることだ、という句である。

この句では、耕作の手習い、すなわち不慣れな人だから、作ることのやさしい夏大根を手初めに作らせることだ、といったところにこの句の理が先行した一面を認めることができる。

支考の句にみられるこのような傾向は、この句に限ったことではなく、支考の作品からかなり見られるところであるが、以下数句を例に挙げて考えてみたい。

日晴ては落花に雪の大井川

(「笈日記 下」)

これは「小夜の中山より大井川を見渡して」と前書を持つ句である。たまたま桜の季節に小夜の中山を通りかかり、そこから大井川のあたりを見渡すと、その大井川の岸の桜は満開で、ちょうど、春の日ざしが明るくさして来た。そしてわずかの風に落花がしきりに舞い散っている。大井川の堤に、まっ白におびただしい桜の花弁が盛んに降りしきる様は、あたかも雪が降っているように見えることよ、という意の句である。

この句では、落花がしきりであるので、雪が降っているように見渡される大井川であることよ、と落花そのものの状態を描くのではなく、比喩的に仕立てたところに、この句の特徴を見ることが出来る。

竹にねてすべりおちばや夕涼み

(「笈日記 下」伊勢)

この句は、伊勢の国、団友亭での吟で、前書が「酒狂の後、人／＼の口質をまねびてみむとて」とある三句中の第二句である。

「竹」とは竹を張った床几であろう。竹のつめたさが直接伝わってくる心地よい竹製の床几に身を横たえて涼を取りながら、そこからすべり落ちてみたいものだ。夕涼みだから、竹の衾に寝てすべり落ちてもいいのではないかと、夕涼みの解放感を満喫している様を諧謔的に表現したものであるが、夕涼みだから「すべりおちばや」と言ったところに、夕涼みの爽涼感を理でとらえた一面をみることが出来る。

宇治にて山なつかしき新茶かな

(「梟日記」乾)

元禄十一年五月八日、備中の国倉敷での吟である。前文に、「鴟がはなといふ処は山城の六地藏に似て侍りといふに、げにもくらしきは、みやこのたつみともながむべかり」とある。訪れた備中倉敷の山の容姿が、都の巽の方に似ていて、その山の姿に都なつかしきさを感じることに、折から新茶の季節なので、新茶を味わい飲むにつけても、茶の名所宇治に似た山が、ひとしお都を思い起こさせてなつかしきさがわき起こってくることに、という意の句である。

折からの新茶に、山に、都なつかしきさを感じるの、その山が宇治に似ているからだ、と因果関係で表現したところに、この句の理に傾

運はれたが、この時従った十名の中に支考がいる。他は、去来・其角・乙州・丈草・惟然・正秀・木節・香舟・二郎兵衛である。

翌十月十三日、遺体は陸路を伏見から義仲寺に運はれ、十四日夜、子の刻に遺言通り義仲寺の木曾義仲の墓のかたわらに埋葬された。

以上のような芭蕉と支考とのかかわりであるが、改めて整理してみると次のようにまとめることができる。

まず第一に挙げるべきことは、

元禄四年八月から十月の芭蕉東下に随行したことを含めて、翌五年正月までの近侍。

風 元禄五年二月の支考奥州行脚に対して餞別句会や呂丸への紹介にみられる芭蕉の心づかい。

の 元禄七年九月からの、芭蕉最後の旅に随伴したこと。

考 などである。これらのことは、芭蕉が、支考を旅に伴い、身边に随伴させ、度重なる連俳の席に同座せしめるほど、人間として、あるいは俳人としての信頼を抱いていたということであり、また芭蕉が自らの俳諧の骨髄をみきわめた「奥の細道」を支考に辿らせることを通して、芭蕉は、支考に俳人として自分の道を実感させようという期待を寄せていたと考えることができよう。

第二の点として「葛の松原」の刊行を挙げることができる。

「葛の松原」は、支考の芭蕉入門からわずか二年あまりしか経過していない時期に刊行されたものであり、しかも芭蕉生前の唯一の蕉風俳論書であること、さらに先に触れたように「葛の松原」の命名、その選述にも関与し、芭蕉の意向が色濃く影を落したであろうことを考えると、支考がそうした俳論書の刊行を認められたというところに、

芭蕉が、支考を芭蕉俳論の理解者として、師説の祖述者として評価していたと考えることができるのである。

第三の点として、芭蕉が辞世句について、中七以下を「なをかけ廻る夢心」の改案を支考に示して意見を求めたことである。

これについては、「笈日記」にも見られるところであるが、辞世句に對してまで、支考の意見を求めたというところに、芭蕉が支考を批評家乃至は論者として評価していたということを示すものと考えられる。

ところで右のような芭蕉と支考との関わり合いの中で、支考が芭蕉から作品の面でどのような影響を受けたかについて考えてみたいと思う。

もともと、文学作品は、作者の人間の表白であり、作者の人間そのものを最も端的に表わすものである。

とするならば、師弟の間で受ける影響は、多面的な師のめざしているものが、そのまま弟子に全円的に継受されるのではなく、師のめざしているものの中から、弟子はその資質と相まって、自ら師に共鳴する、師のある面を特に強く受けとめ、弟子は弟子なりに継承、展開してゆくという性格をもつものであると言えよう。

支考が、芭蕉から何を受けとめたかということを考える場合、芭蕉と支考の作品の中に共通な点を見出すことによって、支考が芭蕉に對したとき、どのような面を、どのように芭蕉から受けとめ、どのように支考がそれを展開していったかを考える事ができよう。

そこで本稿では支考の作品にみられる広義の技術的な特徴をさぐり、それと共通する点を芭蕉の中に求めることにより、支考が芭蕉か

十一日木節亭での芭蕉・木節・惟然・支考の四吟歌仙（「鳥の道」）などに参加した。

六月二十四日付の、杉風宛芭蕉書簡によると、

「盤子、素牛と申兩人一所ニ付添為申候而、不自由成事無御座候間、御氣遣被成間敷候。盤子ハ伊勢山田を仕ふせ候而、小庵を結候よし追々申来候」右の首尾故山田へも少之滞留ニ拙者も当秋冬之間ニまいらでハ盤子為あしく候間、定而参宮がてら参可申候。」

とあって、支考が当時伊勢山田に小庵を結び、秋冬の頃までには参宮を兼ねて芭蕉が訪れようと意図していた消息を伝えている。

七月初めには、丈草とともに、無名庵に芭蕉の薪水の労を助け、八月には伊勢の新庵に滞在した。九月四日、支考は芭蕉・猿雖・卓袋らの九吟歌仙（「芭蕉翁俳諧集」）に同席し、沾圃・芭蕉・支考・惟然の脇起三吟歌仙（「続猿蓑」）が興行されたのもこの頃のことと思われる。

そして、九月八日、芭蕉に従って、惟然・二郎兵衛・又右衛門とともに伊賀を発ち、大坂に向かい、翌九日、奈良を経て大坂に到着した（「笈日記」）。これは芭蕉の最後の旅となる。

この旅での支考・芭蕉の関わりを眺めてみたい。

九月十日夕刻から、芭蕉は寒気・発熱・頭痛に襲われ、こうした病状は二十日ごろまで断続的につづくことになる。そうした中で、九月十四日には、芭蕉・酒堂・支考らの七吟歌仙（「任吉物語」）、九月十九日には其柳・支考・芭蕉・惟然・芭蕉ら八吟歌仙（「画兄弟」）、二十一日には芭蕉・車庸・支考ら七吟歌仙（「まつのなみ」）、二十六日には芭蕉・泥足・支考・惟然ら十吟半歌仙（「其便」）、二十七日に芭蕉・園女・諷竹・支考らの九吟歌仙（「後れ馳」）という具合に、連俳が行われている。

九月二十七日、芭蕉ははげしい泄痢のために臥床、以後病床に伏すことになる。十月五日になって静養のため芭蕉の病床は南御堂前の花屋仁右衛門方に移される（「笈日記」）。

十月八日、芭蕉は辞世句、

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

の句を得るが、夜になって支考を枕頭に呼び、中七以下の改案「なをかけ廻る夢心」について支考の意見を兆している。

さらに十月九日には、芭蕉は自句

大井川浪に塵なし夏の月

を改むべきことを支考に語っている（「笈日記」）。

このあたりから芭蕉が支考を自句の理解者、または批評家として評価していたことが知られる。

十月十日夜、芭蕉は支考に遺書三通を認めさせ、別に半左衛門宛遺書を自筆で書き残したが、その支考代筆の一通には、

「一、百人一首 古今序註。抜書、是は支考へ可被遣候」

とあり、別の一通の末尾には、

「支考此度前働驚、深切実を被尽候。比段頼存候。庵の佛へ、則出家之事ニ候へば遣し候。」

と、芭蕉自身が加筆して、支考に謝意を表わしている。辞世句の改案提示などにみられるように、批評家としても芭蕉の評価を受け、自らの誠意も遺状への加筆という形で報いられたわけである。ここにも芭蕉と支考との間に、格別の信頼感があったことをうかがうことができる。

以後病状が悪化し、芭蕉は十月十二日申の刻に死去する。

遺言により、芭蕉の遺体は義仲寺に葬るため十二日夜、淀川を舟で

(支考)らの十二吟歌仙(「菊の露」)も知られている。

この年の九月二十八日、芭蕉が江戸に下る折(元禄四年霜月十三日付曲水宛芭蕉書簡)、支考はこれに随伴(「笈日記」)して、共に江戸に下るが、その途次、十月下旬には三河新城の太田白雪亭を訪れ、ここに宿泊、芭蕉・白雪・桃隣・支考ら十二吟歌仙や、菅沼耕月亭での芭蕉・耕月・支考の三吟八句(「茶のさうし」)にも参加し、十月二十九日、芭蕉と共に江戸に到着(元禄四年霜月十三日付曲水宛芭蕉書簡)している。

江戸では元禄五年正月二十三日付正秀宛芭蕉書簡に、

「爰元盤子、桃隣一所に越年、打寄／＼御噂のミ申候」

とあるように、支考は元禄五年の新春を江戸で芭蕉と共に過ごした。

この年の二月から六月にかけて支考は芭蕉の「奥の細道」の跡を訪ねるべく、奥州行脚の旅に出るが、この出立に先だって、二月八日付の近藤左吉宛芭蕉書簡に

支考「此盤子と申出家、奥州一見ニ参候間、暫時御山ニ滞留被仰付可被下候。風雅も少相心得候間、御聞被遣可被下候。」

とあって、芭蕉は出羽の近藤呂丸に支考紹介を兼ねた依頼の手配をしている。

こうして二月十日には、支考の奥州行脚饞別吟会が、芭蕉・其角・杉風らによって行われ(「葛の松原」)、奥州に旅立つことになる。その奥州行脚を記念して支考は「葛の松原」を刊行する。

この「葛の松原」は、芭蕉生前に刊行された唯一の蕉門俳論書で、奥書に「於図司之周柏堂而絶筆、元禄壬申五月十五日」、巻頭に「野盤子支考述、潜淵菴不玉撰」とあり、羽黒の呂丸亭で五月十五日脱稿となっており、酒田の不玉も選述に力を貸したことが推察される。しかし「十

論為弁抄」(支考著、享保十年刊)に「奥州よりかへり葛の松原を草稿」とあり、「削かけの返事」にも六月に深川の芭蕉庵に帰った支考が、「葛の松原」の選述について、芭蕉に相談した由記していることから、その完成は江戸に帰ってからと見るべきであろう。

内容は、芭蕉の「古池や」の吟に、其角が上五を「山吹や」と提言したのを芭蕉が斥けたことに「質素にして実」と観じたことを初め、「走・響・馨」などの付合のこと、桃隣・史邦・去来などの句の評、芭蕉の評言も書き留めている。

書名について「去来抄」に、

「去来曰、先師の俳諧書の名は和歌・詩文・史録・物語等とたがひ俳諧有べしと也。されば先師の名づけ給ふを見るに、みなし栗・三ヶ月日記・冬の日・ひさこ・猿みの・葛の松原・笈の小文皆其趣也。」とあって、命名に芭蕉が深くかわっていたことが察せられ、それらのことから、内容の面で芭蕉の意向を強く反映していると考えられる。

六月下旬、奥州行脚を終えて江戸に帰った支考は、芭蕉庵を訪れている。

元禄七年になると、前年六月下旬から郷里に帰っていた支考は、閏五月十七日、丈草・智月と共に乙州亭で、大津滞在の芭蕉に会い、京へ同行した。(元禄七年閏五月二十一日付曾良宛芭蕉書簡)。そして閏五月二十三日には芭蕉に従い、膳所から嵯峨の落柿舎に移り(「市の庵」)、同月下旬、落柿舎で、去来・浪化・芭蕉・丈草・支考・惟然らの九吟歌仙・諷竹・去来・芭蕉・惟然・支考らの七吟歌仙(「砂川」)などに参座している。

六月十五日、芭蕉に従い膳所に戻り、翌十六日には曲翠亭の月見の会に同席し、芭蕉初め曲翠・支考ら五吟歌仙(「続猿蓑」)に、六月二

支考の俳風

——芭蕉とのかかわりから見た——

小 瀬 渺 美

Haikai style of Shiko

—— a study from the relation

to the style of Basyo ——

Hiromi Kose

芭蕉の俳諧と支考の俳諧について考えてみようとするわけであるが、まず、芭蕉と支考が師弟としてどのように関わり合っていたかを見、その関わりを深さを通して、両者の俳諧に共通する点かどのようのものであったかを考えてみたい。すなわち、支考が芭蕉にどのような親炙し、芭蕉から何を継承し、更にどのように展開せしめたかを検討してみたいと思う。

まず、芭蕉と支考との関わり合いの主なことから年代的に記してみると次のようになる。

「削かけの返事」(渡辺 狂 狂 支考、享保十三年正月奥)によれば、支考は元禄三年三月近江木曾塚の無名庵において、丈草、乙州同道で芭蕉に初めて対面したという。

この支考入門の時期については、元禄三年か四年、または四年以

前とする説があったが、

ひき起す霜の薄や朝の門

丈 草

を立句とする、丈草・支考・芭蕉・史邦・去来・野童の六吟歌仙(「鶉の音」)が、元禄三年冬、京都で巻かれたものと推定されること、「削かけの返事」に

「我師祖翁との対面は元禄三年三月桃の日也。木曾塚の無名庵にて、丈草・乙州と同道也。我師は其頃在京にて(略)かくて四月の中頃、祖翁へ随侍せられ、幻住庵の山居の間も薪水の労は我師一人なり。」

と見えていることなどによって、元禄三年入門と考えたい。

また、芭蕉書簡の中にも

「旧臘之御帖伊賀へ相達シ、三月十八日之御帖、頃日尚白、膳所へ被届、幼住庵と申破茅あまり静ニ面白候故是にだまされ卯月初入庵」(元禄三年四月十日付如行宛芭蕉書簡)

「拙者も頃日せゞへ出申候而、幼住庵と申庵ニ休息」(元禄三年四月十日付此筋、千川宛芭蕉書簡)

などによって、芭蕉は、遅くとも元禄三年には四月初めまでには伊賀から大津方面に出ていることが知られるなどのことから、越人の「不猫蛇」(享保十年稿)や「猪ノ早太」(享保十四年稿)など、支考批判の中の越人紹介説よりは、支考の三年春入門説に信憑性を認めるべきであろう。

元禄四年には、八月十六日、無名庵で十六夜の月見の後、舟で堅田の成秀亭を訪い、芭蕉・路通・丈草・惟然ら六吟歌仙(「笈日記」)の興行に加わり、閏八月十八日には、芭蕉に従って珍碩、楚江らと石山寺へ参詣(「西の雲」)したほか、九月三日の路通・芭蕉・正秀・盤子